

## 目次

まえがき

iii

### Part I 協働学習のデザインと意義

---

- 第1章 オンラインの国際協働学習の意義  
村田晶子、佐藤慎司 3
- 第2章 協働の深さの模索  
身近なテーマから SDGs のプロジェクトへ  
村田晶子、プレフューメ裕子、  
マルチェッラ・マリオッティ、ダオ・ティ・ガー・ミー 27
- 第3章 日本語学習者のための Scaffolding  
プレフューメ裕子、村田晶子 45
- 第4章 越境学習のジレンマを通じた学び  
村田晶子、マルチェッラ・マリオッティ 63
- 第5章 複言語・マルチモーダルなリソースを用いた  
「第三の空間」での協働  
村田晶子、ダオ・ティ・ガー・ミー 83

**Part II 日本と海外大学をつなぐ多様な COIL**

- 第6章 **オンライン交流学习における「協働」のあり方の模索**  
ある日韓混合グループに生じた非協働性の問題に着目して  
中川正臣、亀井みどり 103
- 第7章 **SDGsをテーマにしたweb雑誌作成プロジェクトとTranslanguaging**  
日米COILプロジェクトから  
神吉宇一、熊谷由理、嶋津百代、  
福地麻里、グエン・ホン・ゴック 121
- 第8章 **ニューノーマル時代の国際共修**  
オンライン学習を通じた学びの検証  
末松和子 139
- 第9章 **コロナ禍で留学希望の学生をどう支えていくか**  
オンライン国際交流にみる可能性と課題  
秋庭裕子 159
- 第10章 **多文化間コミュニケーションの実践で培われる自己相対化能力**  
日米大学のCOIL共修活動から  
石原紀子、関本 幸 177
- 第11章 **国際協働学習における翻訳の意義**  
日米大学のTranslanguagingの協働から  
近松暢子 195

Part III 国内のバーチャル共修と学習支援

---

- 第12章 孤立する留学生のオンライン・ソーシャルサポート  
コロナ禍でのボランティア学生の取り組み  
村田晶子 215

- 第13章 日本語教師／学校教員養成課程の学生達の  
オンラインでの学び  
地域の外国人・年少者との実践を通して  
島崎 薫、高橋亜紀子、  
早矢仕智子、ヒューレット柳澤えり子 235

- コラム 日本語教育を学ぶあなたへ  
オンライン国際交流の場を生かして  
澤邊裕子 257

Part IV ゆるやかなオンラインの学びの共同体

---

- 第14章 日系ディアスポラの青年をゆるやかにつなぐ  
オンラインの協働  
「CLD-Online」がもたらすアイデンティティ変容と脱中心化  
松田真希子 263

- 第15章 「世界と私」  
日本語話者をつなぐプロジェクト  
アルン・シャム 285

- おわりに—未来を創る VE へ—  
佐藤慎司 303

- 執筆者一覧 309

## 第 1 章

# オンラインの国際協働学習の意義

村田晶子、佐藤慎司

### 1. はじめに

ICTテクノロジーの発展により、世界の人口の半数以上の人々がインターネットでつながり、様々な国際連携が行なわれる時代において、学生達が国境を越えてオンラインで協働する力を身に付けていくことは、他者と相互作用しながら未来を作っていくために欠かせないスキルとなっている。地理的に離れた人々がオンラインでつながり、協働し、学び合うことを目的とした教育的な活動は、バーチャル・エクスチェンジ (Virtual Exchange、以下、VE)、または、コイル (Collaborative Online International Learning、以下、COIL) の名称で呼ばれる<sup>1</sup>。本書ではこれらの用語を以下のように用いる。

①オンラインの協働学習の総称：VE

②複数の大学間のオンライン国際協働学習：VE または COIL<sup>2</sup>

オンラインの協働学習は 1990 年代から始められ、外国語教育、異文化コミュニケーション教育を中心として発展し、専門教育における国際比較、学際的な協働プログラム、ビジネス研修、NGO のプログラムなど多様な教育

<sup>1</sup> オンラインの国際協働学習は VE、COIL などの他に、Telecollaboration、E-Tandem など様々な名称で呼ばれ、O'Dowd(2018)はその総称として VE を用いている。

<sup>2</sup> 大学間のオンライン国際協働学習は「COIL」と呼ばれることも多いため。



## 第2章

# 協働の深さの模索

身近なテーマから SDGs のプロジェクトへ

村田晶子、プレフューメ裕子、  
マルチェッラ・マリ奥特ティ、ダオ・ティ・ガー・ミー

### 1. はじめに

地理的に離れた複数の教育機関に所属する学生達のオンラインでの国際協働学習は、COIL (Collaborative Online International Learning) と呼ばれる。COIL ではプログラムを実施する教育関係者が連携し、それぞれの教育環境や科目の特性のすり合わせを行ない、双方の学生が参加することができるようなプログラムの設計を行なうことが重要となる。

次頁の図1は国境を越えた複数の教育機関の協働において、教員間、学生間の二つの協働が行なわれることを示しており、例えば日本の大学の異文化コミュニケーションのクラス(コースA)とアメリカの大学の日本語クラス(コースB)が協働する場合、まず教員間で相談し、組織の環境、科目の目的、使用言語、協働テーマと形態、成績評価や単位認定など、様々な要素のすり合わせを行ない、双方の参加者にとって互恵的な活動となるようにデザインを工夫することが重要となる。

## 第3章

# 日本語学習者のための Scaffolding

プレフューメ裕子、村田晶子

### 1. はじめに

本章は日米の学生間で行なったオンラインの協働プロジェクトにおける、教員の学習支援（Scaffolding）について分析する（実施概要は第2章参照）。海外の大学で日本語を学ぶ学習者にとって、オンラインで日本の学生と日本語を用いて協働活動を行なうことは、コミュニケーション能力を高める貴重な機会となるが、単純に学生達をつないで、グループで活動させ、彼らの自主的な取り組みに任せるだけではなく、支援が必要とされる領域を見極め、学習支援の仕組み（Scaffolding、足場かけ）を作っていくことが望ましい。

Vygotsky (1978) は学習者が自主的に学ぶことができるレベルと、大人や周囲の人々の支援を受けてできる問題解決のレベルの差を「最近接発達領域 (Zone of Proximal Development: ZPD)」と呼んでおり、Wood, Bruner & Ross (1976) は Vygotsky の理論をもとに、学習支援者がチュータリングにおいて学習者のレベルに応じたものだけを与えるのではなく、学習者が学びにくい領域を見分け、支援し、最終的には自主的に学べるようにしていくことが重要であると指摘している。こうした支援者による Scaffolding は、バーチャル・エクステンジ（以下、VE）のような他者と関わる体験的な学習においても重要な意味をもっている。教員は、複数の組織に所属する学生達が協働する際の困難な点を理解し、学生達が自分達で問題を解決できるよう

## 第4章

# 越境学習のジレンマを通じた学び

村田晶子、マルチェッラ・マリオッティ

### 1. はじめに

本章ではオンラインの国際協働学習（COIL）における学生達の「越境学習」（異なる組織に所属するメンバー間のジレンマと対立を乗り越えた学び）のプロセスを分析する。

COILは、地理的な境界線を越えて、学生同士がオンラインでつながり合う協働であるため、物理的な留学と比べて経済的な負担が少なく、包摂的な国際教育として大きな可能性をもっている。しかし、COILの協働は、二つ、あるいは複数のコースの差異を調整しながら行なうものであり、社会・組織的な違い（学年歴、テクノロジー、学習言語の社会・経済的な価値等）、科目の違い（目標、使用言語等）、グループダイナミクス（例えば、グループワークへの取り組み方）、個人のモチベーション等、様々な要因により、協働が機能しなくなる場合もある（O'Dowd & Ritter, 2006）。こうした要因は常に問題となるわけではなく、協働プログラムのある特定の場面で課題として浮かび上がることが多い（例えば、国際交流を主目的としたゆるやかなおしゃべりは順調に進んだものの、プロジェクト型の活動に移行し、決められた期間内に成果物を作り出す活動において意見がぶつかり合い、協働に問題が発生するケースなど）。

しかし、COILにおけるせめぎ合いは協働の障がいとなるものではなく、むしろ協働学習中に生じた問題を振り返り、メンバー間で話し合い、それを

## 第5章

# 複言語・マルチモーダルなリソースを用いた「第三の空間」での協働

村田晶子、ダオ・ティ・ガー・ミー

### 1. はじめに

留学や海外赴任などで新しい国に移動する場合、移動先の国で活動するために、その国の文化や言語を習得し、適応することが求められる。これに対して、オンラインの国際協働学習は特定の国や地域への移動を前提としないバーチャルな空間での協働であり、複数の教育機関に所属する学生が集まり、どちらか一方のグループが他方から学ぶのではなく、お互いの強みを生かし、力を合わせて「第三の空間」において学び合う機会を提供する。

「第三の空間」(third space / third place) は、ポストコロニアル理論において植民者と被植民者の間の文化の表象分析に用いられた概念で、Bhabha (1994) は支配者と被支配者の非対称的な関係性は固定化されたものではなく、ダイナミックに変容するハイブリッドな「第三の空間」の創造的な可能性を指摘している。Kramsch (1993) は「第三の空間」の可能性をことばや文化の教育にも見出し、外国語教育や外国語学習の場を、母語規範や本質化された文化の教え込みの場として捉えるのではなく、様々な背景をもつ人々が対話するハイブリッドで創造的な対話空間として捉えていくべきであると指摘する。こうした「第三の空間」の視点は、地理的な境界線を越えてオンラインの中間地点で対話する COIL の意義を照射する概念としても重要な意

## 第6章

# オンライン交流学習における 「協働」のあり方の模索

ある日韓混合グループに生じた非協働性の問題に着目して

中川正臣、亀井みどり

### 1. はじめに

言語教育における日韓交流学習（以下、日韓交流学習）は、研究資料として確認できるものだけでも30年以上の歴史がある。これらの日韓交流学習は、多くの場合、学習者の言語能力の向上や他文化・自文化を認識する場として活用されてきた。しかし、日韓交流学習における交流相手は、言語能力の向上や他文化・自文化の理解をもたらすためだけに存在するのだろうか。

本来、コミュニケーションとは、他者との情報のやりとりのみならず、働きかけたり、助け合ったり、ともに創造していく等の社会的な営みであると言える。また、コミュニケーションは、自分が社会においていかなる存在であるかを示し、他者との関係の中で自らの位置付けを行なう場にもなる（カルトン, 2015: 20）。交流学習においても、コミュニケーションを進めるなかで言語に関するスキルや知識を習得したり、異文化理解を深めることができる。しかし、学習を通じて出会う他者、つまり交流相手や他の学習者をはじめとする交流学習に関わる人々は、自分の言語スキルの向上や知識の蓄積、あるいは異文化理解の促進だけのために存在するのではない。他者は自分とともに何かを創り上げていくうえで欠かせない存在であり、ともに共生社会

## 第7章

# SDGs をテーマにした web 雑誌作成プロジェクトと Translanguaging

日米 COIL プロジェクトから

神吉宇一、熊谷由理、嶋津百代、  
福地麻里、グエン・ホン・ゴック

### 1. はじめに

本章では、SDGs をテーマとして Zoom 等のオンラインツールを用いて実施した Collaborative Online International Learning (COIL)<sup>1</sup> プロジェクトの実践について報告する。本章で扱う取り組みは共同執筆者達が所属している S 大学、JM 大学、JK 大学の三大学で 2020 年度に実施した COIL プロジェクト（以下、「本プロジェクト」）である。本プロジェクトは 2019 年度に S 大学、JM 大学の二大学で取り組みを行なった後、その振り返りを通して改善

---

<sup>1</sup> オンラインを用いた活動は様々な呼び方をされているがその定義がはっきりしない点が課題であると言われている (O'Dowd, 2018)。本書が COIL という用語を用いて編集されていることから本章でも COIL を用いるが、もともと本取り組みはテレコラボレーションという用語で実践を行なっていた。なお、O'Dowd(2018)によると、外国語教育の分野ではテレコラボレーションは一般的な語として使われているがその他の分野ではほとんど使われていないとされている。テレコラボレーションという用語自体は Warschauer (1996) が使い始めたとされている。

## 第8章

# ニューノーマル時代の国際共修

## オンライン学習を通じた学びの検証

末松和子

### 1. はじめに

世界規模で猛威をふるい続ける新型コロナウイルスは、様々な側面で国際教育交流に波紋を広げている。2020年4月に、国際大学協会が世界111カ国・地域の424大学を対象に行なった調査では、約9割の大学が、留学プログラムの中止など、予定していた国際教育交流が直接的な影響を受けたと回答した<sup>1</sup>。学生の国・地域間の移動がコロナ前の状況まで回復するには数年間を要する見方もあるなかで、ニューノーマル時代の新しい国際教育のあり方について議論が進んでいる。欧州では、21世紀に入っただけで、経済的困難などの諸事情から留学したくてもできない学生への救済策として、国内にしながら国際的な学習体験を可能にする「内なる国際化」運動が広がった。近年は、これにテクノロジーを掛け合わせたオンライン国際協働学習（Collaborative Online International Learning、以下、COIL）が注目されるようになり、COIL開発・実施用の教材はWEB上でも多数、提供されている。遠隔教育先進国の米国では、コロナ前の2018年時点で、すでに全大学生の35%にあたる約700万人がオンライン授業を経験するなど（米国教育

<sup>1</sup> Marinoni, G., Van't Land, H. & Jensen, T. (2020) *The Impact of COVID-19 on Higher Education around the World: LAU Global Survey Report*. [https://www.iau-aiu.net/IMG/pdf/iau\\_covid19\\_and\\_he\\_survey\\_report\\_final\\_may\\_2020.pdf](https://www.iau-aiu.net/IMG/pdf/iau_covid19_and_he_survey_report_final_may_2020.pdf), (2021年2月21日アクセス).

## 第9章

# コロナ禍で留学希望の学生を どう支えていくか

## オンライン国際交流にみる可能性と課題

秋庭裕子

### 1. はじめに

2020年2月下旬頃から、日本でも新型コロナウイルス感染拡大が深刻化し、国内の多くの大学と同様、所属大学でも3月末にオンライン授業への全面移行が決定した。これに合わせて、オンライン授業準備を行なうこととなり、授業開始時期も4月から5月に変更となった。世界規模での新型コロナウイルス感染拡大によって、所属大学の協定校に派遣留学していた学生達も留学半ばにして帰国を余儀なくされ、4月来日予定の交換留学生は100名近くを予定していたが数名が来日するだけとなった。そして、2020年9月の秋学期入学の交換留学生はゼロとなった。学内海外派遣留学制度で内定をもらっていた学生達も海外留学ができなくなり、念願の海外留学を断念して就職活動をするべきか、留学のチャンスを待つべきか、色々と悩んでいる。そんな先輩や友人達を見て、海外留学をしたいと漠然と思っている学生はどのような日々を送っているのだろうか。派遣留学制度に申請する前から留学を諦めてしまうのだろうか。そして、このような危機的状況下で、教育者として、海外留学を志望している学生をどのように支えていけるのだろうか。

本章では、筆者が海外留学を希望する学生向けに開講している「海外留学



## 第10章

# 多文化間コミュニケーションの実践で 培われる自己相対化能力

日米大学の COIL 共修活動から

石原紀子、関本 幸

### 1. はじめに

本章では、日米の大学で外国語や多文化間コミュニケーションを学ぶ学生間の交流を促すことで、社会的なテーマに関する対話に主体的に携わる経験を提供し、その省察や分析を通して多文化理解や自己相対化能力を高めることを目的とした共修活動について分析する。

通常の授業では、外国語を有意義な意思疎通のために用いる機会が少ないこと、言語の習得が中心となり多文化理解に焦点が当たりにくいこと、多文化について学ぶ授業であっても机上の空論や省察に頼りがちであること、コロナ禍で留学や多文化交流の機会が減少していること等を踏まえ、共修活動を双方の授業に取り入れる体験型の学びを目指した。

### 2. 理論的背景

近年グローバル化は加速し複雑さを増している。国際的な政治経済の密接なつながり、文化の融合、人とももの移動、そして多くの情報が交錯するなかで、グローバルな視点をもった多文化間コミュニケーション力が必要にな

## 第 11 章

# 国際協働学習における翻訳の意義

## 日米大学の Translanguaging の協働から

近松暢子

### 1. はじめに

Collaborative Online International Learning (以下、COIL) は、情報通信技術を利用した海外の教育機関との協働学習活動である。筆者の所属する大学 (以下、A 大学と表記) の日本語・日本研究科では 2019 年秋学期に翻訳コースを履修する日本語上級学習者を対象に日本の国立大学 (以下、J 大学と表記) と 6 週間に渡る協働翻訳プロジェクトを行なった。本章では双方の学習言語と母語 (つまり英語と日本語) を使った Translanguaging (Garcia & Wei, 2014) の学習設定の元、国際協働言語学習への効果や課題を考察する。

A 大学は米国中西部最大の街、シカゴに位置する私立総合大学で、学生は全米から集まる一方、都市部のため自宅から通学する学生も多く、また First-generation college student、つまり移民の家庭で初めて大学教育を受ける学部生の割合が 3 名のうち 1 名と高い。学業と仕事の両立、家族の補佐等、様々な理由から、長期留学できる学生はごく一部となる。そういった環境のなか、所属大学では 2013 年度以来 Global Learning Experience (GLE) と名打って海外の教育機関とオンラインでつなげ、バーチャルな遠隔連携授業を 31 カ国の大学と 150 以上のコースで展開している (DePaul University Global Engagement Learning, 2021a, 2021b)。この GLE は一般に COIL と呼ばれ、全米でもニューヨーク州立大学を中心として、文系理系を問わず様々

## 第12章

# 孤立する留学生の オンライン・ソーシャルサポート

コロナ禍でのボランティア学生の取り組み

村田晶子

### 1. はじめに

新型コロナウイルス感染症の拡大により、2020年度の授業が対面からオンラインに移行し、人との接触機会が減少したことから、多くの学生が孤独やストレスを抱えた。とりわけ留学生の場合、日本でのネットワークが限られ、孤独や不安を感じていた人々が多く、人とつながり、日常の問題を相談できるようなサポートが必要とされた。

本章で分析するコロナ禍で孤立する留学生達のオンライン・ソーシャルサポートは、こうした状況を踏まえて始まったボランティア学生達の活動である。本章ではボランティア学生による留学生のソーシャルサポートを分析し、①やさしい日本語・英語を用いた来日（感染症の隔離期間含む）の見守りと情報提供、②留学生の母語でのメンタルサポート、③留学生と社会とをつなぐサポート、④進学サポート、⑤就活サポートなどの実態を明らかにした。また、支援活動を通じた参加者（ボランティア学生、留学生）の様々な学び合いを分析した。そして最後に、こうしたボランティアのオンラインのソーシャルサポートの取り組みは、非常時のボランティア活動の新しい可能性を示すものであり、さらには、非常時のボランティアから、平時にも可能

## 第13章

# 日本語教師／学校教員養成課程の 学生達のオンラインでの学び

地域の外国人・年少者との実践を通して

島崎 薫、高橋亜紀子、  
早矢仕智子、ヒューレット柳澤えり子

### 1. はじめに

新型コロナウイルスの蔓延に伴い、2020年4月16日に全都道府県に緊急事態宣言が出され、政府から人との接触は最低7割、極力8割削減するように要請された。職場でもテレワークやローテーション勤務が推奨されたり、飲食店などに休業要請が出た地域もあったりと、多くの人達の生活に大きな影響を与えた。各教育機関では、休校となってしまうところもあったが、コロナ禍でも学びを止めない方策が決死の努力で進められ、高等教育機関を中心に授業のオンライン化が急速に展開した。

本章では、そういった授業のオンライン化によって実現した日本語教師／学校教員養成課程における授業と教育現場をつなげた三つの実践を取り上げる。実践①は地域の外国人と日本語教育専攻の学生の会話セッション、実践②はインターナショナルスクールの生徒と日本語教育専攻の学部3年生との演劇プロジェクト、実践③は学校教員養成課程の学生による外国につながるをもつ子どもの支援である。学習環境デザインの枠組みを用い、これらの実践における学生達の学びを考察する。

## 第 14 章

# 日系ディアスポラの青年を ゆるやかにつなぐオンラインの協働 「CLD-Online」がもたらすアイデンティティ変容と脱中心化

松田真希子

### 1. はじめに

#### 1.1 日系ディアスポラとしての CLD 青少年

ディアスポラとは、自発的または強制的に祖国を離れて、離散して暮らす状態を表す（ホール, 2014）。世界に 1,800 万人いるといわれるインド系移民（印僑）が代表的なディアスポラとされるが<sup>1</sup>、植民地時代に祖国を離れた黒人、そしてハワイや北米・南米大陸に渡った日系人もディアスポラに含まれる。南米大陸の日系コミュニティは約 200 万人で構成される世界最大の日系ディアスポラである。

南米日系ディアスポラは、通常、生活言語・教科言語としては現地語を用いており、日本語が家庭内言語・継承語として使用されている家庭も減少している（中東, 2018）。デカセギ等で日本と現地を往還する場合もあり、境界は多様で連続的であるが、多くの日系ディアスポラの子弟は日本人／現地

<sup>1</sup> United Nations Department of Economic and Social Affairs (2021) *International Migration 2020: Highlights*. [https://www.un.org/development/desa/pd/sites/www.un.org.development.desa.pd/files/undesa\\_pd\\_2020\\_international\\_migration\\_highlights.pdf](https://www.un.org/development/desa/pd/sites/www.un.org.development.desa.pd/files/undesa_pd_2020_international_migration_highlights.pdf), (2021 年 10 月 3 日アクセス).

## 第 15 章

# 「世界と私」

## 日本語話者をつなぐプロジェクト

アルン・シャム

### 1. はじめに

2020年3月からの新型コロナウイルス感染拡大によって、対面式の授業ができなくなった教育機関はインターネットを媒介とした遠隔教育を導入せざるを得なくなり、世界中で教育のオンライン化が急速に進んだ。世界の日本語教育の現場でも、それまでに対面式で教育を受けてきた学習者は、教室という物理的なスペースだけではなく、学びが生かせるような交流の場を失ってしまった。遠隔教育が急に普及したとはいえ、対面式の授業を補う形のものだと、以前の物理的な教室をただ代替することにすぎない場合が多いのではないだろうか。

教育のオンライン化は、バリアが色々あるものの、日本語が以前教室内でしか活用できなかった学習者が、言語を用いて国や地域を容易く超えた新しいコミュニティ・新しい地域づくりができる時代になってきている。こういった新しい可能性を目的に、2020年4月から、筆者はWeb会議システムのZoomを利用し、世界<sup>1</sup>の「日本語話者」<sup>2</sup>が集まって、毎回違うテーマについて、その日の疲れや大変なことを忘れ、お互いのことを知り合うおしゃべ

<sup>1</sup> 第38回は29カ国からの参加者が申し込んだ。

<sup>2</sup> 「日本語話者」の定義は第2節を参照のこと。